

二つの大森貝塚

長谷川 修

一八七七年、来日三日目に横浜から新橋へ向かう列車に乗ったモース博士は、大森停車所を出たところで左手山側の崖に貝殻の堆積があるのが目にはいった。後にその場所を発掘調査し大森貝塚を発見したと、ここまでは子供の頃の読本に載っていた。

長じて池上に住み、品川歴史館のモースコーナーに立ち寄ると、大森貝塚の発見だけではないモースの姿が現れる。

モースは、日本の考古学黎明期に、Shell Mound (貝墟、貝塚) の概念を導入し、土器の特色から Cord Marked Pottery (縄紋土器) と命名し、日本最初の発掘調査論文を書いた。博士の専門は動物学・腕足動物であるが、滞日の二年間に東京大学で講義したのは、考古学、人類学、進化論、動物学等の広い範囲に及ぶ。また日本の陶器や民具にも詳しく、日本の文化を世界に紹介した。

JR大森駅を出て池上通りを北に少し行くと、右側のNTTビルの前に「大森貝墟」の案内板がある。顕彰碑はビルの裏手の線路脇にあつて、人は立ち入れず窮屈な場所だ。博士没後の一九三〇年に建てられ、題字はモースの発掘調査に同行した佐々木博士の筆による縦書きの雄渾なもので、風格に富む。

池上通りを更に進み品川区大井に入った所の右側に「大森貝塚遺跡庭園」がある。この庭園は、品川区が一九八〇年代に大掛かりな発掘調査を行った場所で、貝塚の復元やモースの胸像、縄文遺跡の展示等があつて、ここには縄文の風が吹いている。庭園の片隅の線路脇に「大森貝塚」顕彰碑があり、こちらも「貝墟」と同じ頃に建てられ、題字は毎日新聞の本山社長の筆による横書きだ。

大田区と品川区の区境を挟んで三〇〇M程の所に二つの碑が建てられ、モース発掘の地を巡って本家争いとなつた。論争は五〇年近く続いたが、七八年にモースが地主に払った補償金の文書と公図が発見され、発掘地は品川区で確定する。

大森は「大森貝塚」で全国的に知名度を高め、「日本考古学発祥の地」を自負してきただけに、大田区の住民としては少し残念な気がする。